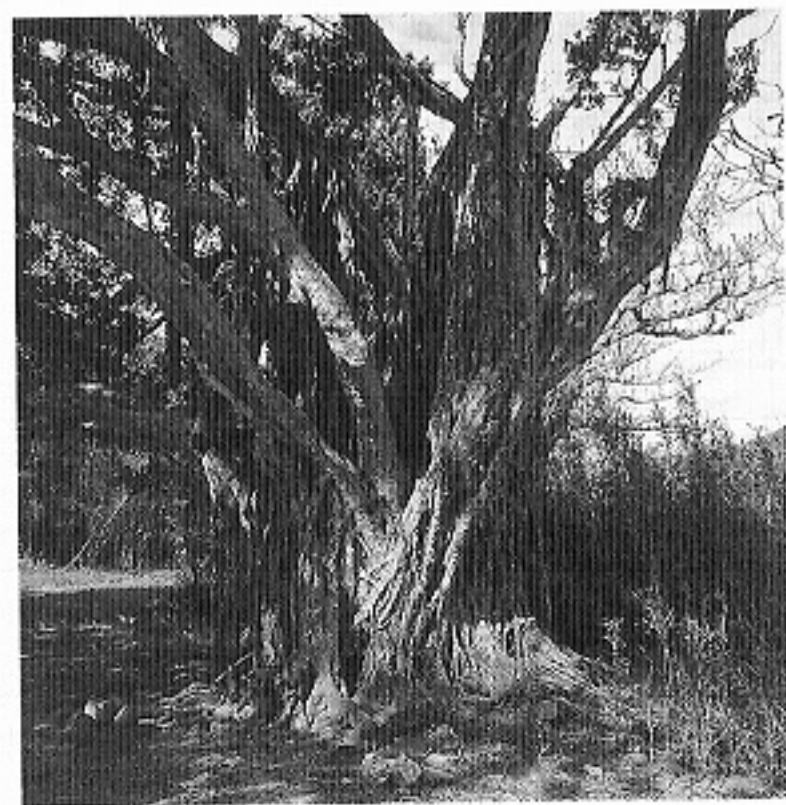


注

- 1 高橋哲哉『靖国問題』（ちくま新書、二〇〇五年）。
- 2 高橋哲哉『反・哲学入門』（白澤社、二〇〇四年）。
- 3 高橋哲哉『国家と犠牲』（NHKブックス、二〇〇五年）。
- 4 矢部喜好（一八八四—一九三五）福島県生まれの牧師で、非戦論者。セヴンズデー・アドヴェンティストに属していたが、後に同胞教会に転じる。日曜学校の普及につくした。
- 5 内山愚童（一八七四—一九二一）。曹洞宗の僧侶。箱根・林泉寺の住職だった。
- 6 高木顕明（一八六四—一九二一）。真宗大谷派の僧侶。和歌山・浄泉寺の住職だった。



特集 慰霊と追悼

国民道德論と『先祖の話』

1 はじめに

新国学談に代表される柳田国男の固有信仰論について、川田稔は、国家神道批判を目的にした著述であったと指摘したことがあった^①。私は、かつて「固有信仰論の学史的意義について」において川田説を批判的に検討し、柳田の固有信仰論は、国家神道崩壊後の、神社存続の危機に対して、神道を擁護しようとしたものであったことを論じた^②。その折に私は、柳田の神道研究は、国家神道崩壊後の社会において、戦前の国民道德論の代替機能をはたしたのではないか、ということを示唆した。近年、矢野敬一は、私の論文にも言及しながらも、国民道德論と

はやし まこと

林 淳

柳田との関連について、精緻な議論を展開して、穂積陳重などの論説がいかに柳田の研究と通底しているか、柳田の祖先祭祀研究をいかに位置づけるのかについて論じている^③。私が、前稿を書いたときには、国民道德論について、わずかな知識を持っていたにすぎなかった。本稿は、矢野の論文に刺激を受けて、国民道德論について若干調べたものであり、国民道德論と柳田の『先祖の話』の異同を捉えようとしたものである^④。

2 「国民道德」の背景

まずこの言葉は、いつから使われるようになったのか。藤井健治郎『国民道德論』において、つぎように指摘し

ている。

吾人が調査したる限りに於いては、国民道德なる語が思想界・教育界に用ゐらるるに至つたのは、寧ろ近頃のことであつて、余り古いことではないやうである。如何に遠くその淵源を索ねやうとしても、恐らく明治四十一年以前に遡ることは能きまいと思ふ。

藤井は、明治四十一年頃から、この言葉が使われるようになった理由を、つぎのように解説している。明治三十七、八年の日露戦争後（明治三十七、八年）の社会では、一等国になったのだという自惚れやデカダンスが、社会に蔓延し、それとともに自然主義文学、共産的社会主义が台頭し、こうした趨勢に対して危機感を抱いた人々から、忠孝優位の道德を掲げた国民道德論が提唱されるようになった。国民道德論は、新しい危機的状况を打破しようとして説かれたものであった。その中心的役割をはたしたのは、文部省であった。文部省は、明治四十一年頃に国民道德という語を使つており、明治四十三年五月公布の

師範学校修身科教授要目中でも、「国民道德ノ由来及其ノ特質」という言い方を使った。同年十二月、文部省において、おもに師範学校長や師範学校の修身科担当の教論を集めて、国民道德の講習会を開いている。明治四一年末頃から四二年はじめにかけて民間における講演会、雑誌などでも、国民道德が散見するようになったという。国民道德に類似した語彙として、「我が国道德」とか、「倫理学」という言葉も同時期に使われていた。明治四四年七月に公布された中学校教授要目には、「我が国道德」という語彙が使用されている。これには、国民道德では漠然たる憾みがあり、日本固有の道德を表示することができないという理由であつたようである。しかし「我が国道德」という用語は自然消滅して、国民道德論に統合されていった。他方で「倫理学」は、西洋の倫理学を受容したものであり、国民道德論と倫理学との関係について、さまざまな立場からの議論が行なわれた。藤井は、国民道德論を、明治四十一年以降の思想問題として成立したと考えており、そこには藤井の立場が、よくあらわれている。しかし国民道德論の代表的な論者で

あつた吉田熊次によれば、そのルーツは明治の初期より伏在していた。吉田は、つぎのように小学校の修身科目の歴史を回顧している。第一期は、明治初期から明治一二、三年までで、「小学教則時代」と呼ばれている。外国の修身の教科書が使われて、授業が行なわれていた。明治五年の学制においては下等小学校は、綴学、習字、単語、会話、読本のつぎの六番目に修身が置かれており、当初、修身がそれほど重んじられてなかった。第二期は、「小学校教則綱領時代」であり、明治一四年から二二年までである。ここでは前期を反省して、儒教を中心にした教科書で修身が教えられていた。多くの教科書が翻訳のものであつたのに対して、修身のみが儒教的なものになつた。第三期は、明治二三年の一〇月に渙発された教育勅語が、修身の中心になつた。「改正小学校令時代」と言われる時代で、明治二三年から三六年までである。第四期は、明治三十七年以降で、「国定修身書時代」である。吉田の本が出たのは、明治四四年なので、この時期がどこまで継続するかは、不明である。吉田がまとめた修身の歴史は、修身だけではなく、社

会の動向にも一致している。明治一〇年代の欧化主義の反動として、二〇年代には国粹主義が広がっていき、三〇年代には日露戦争を体験して日本主義が瀾漫し、新たに社会主義が青年層に流行つたことは、よく知られたことである。こうした吉田の議論をふまえるならば、修身教育の前史の上で、明治四十一年頃に国民道德論が登場したと見るべきであろう。

3 井上の国民道德論

井上哲次郎は、東京帝国大学文学部の哲学の教授であり、彼の門下が文学部の各分野の教授となつていき、人文学の礎を築いた人物であつた。明治二四年の内村鑑三の不敬事件では、キリスト教批判をくりひろげて有名になつた井上であつたが、国民道德論では文部省の意向をうけて積極的に論を打ち立てた。明治四四年七月に東京帝国大学で中等教員講習会が開かれたことがあつたが、そこで「国民道德概論」を講じたのは、井上であつた。講演記録が「国民道德概論」として刊行されたが、章立てを、紹介しておこう。